九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 炭礦の社会史研究会編『新聞記事にみる茨城地域の炭礦と社会 明治大正編』『聞きがたり茨城の炭礦に生きた人たち』

山下，直登
桃山学院大学経済学部

https://doi.org/10.15017/13761

出版情報：エネルギー史研究 ： 石炭を中心として. 15, pp.213-214, 1991-12-25. 九州大学石炭研究資料センター
バージョン：
権利関係：

## 史料紹介

炭礦の社会史研究会編

『新聞記事にみる茨城地域の炭礦と社会　明治大正編』

『聞きがたり茨城の炭礦に生きた人たち』

山下直登

日本の石炭産業は北九州、北海道、常磐の三つの地域に集中しており、それぞれが生産や流通の構造に特徴をもちつつ、日本近代のエネルギー産業のリーディング・セクターとして発展してきたことは周知の通りである。このうち、北九州地域の石炭産業史研究については厖大な蓄積があり、また、北海道石炭産業についてもわれわれはかなりの研究をもっている。

しかしながら、常磐炭礦についてはこれら二つの地域の炭礦史研究に比べるとはるかに立ち遅れていることは否めない。その理由はいくつか考えられるが、常磐炭礦の石炭資本の規模が零細で（従ってその消長が激しく）、また、低炭質で、市場も京浜地域を中心とする関東地方に限定されていたことなどが深く関係しているように思われる。そのためか、常磐炭礦に関する文献史料は極めて少なく、史料の欠落が研究を進めるうえで、大きな障害ともなっているのである。

しかし、こうした状況のなかで、近年常磐炭礦の歴史を堀り起こし、それを記録することを目的として、地元の研究者達が地道な研究活動を続けている。ここに紹介する二冊の史料集を編集した「炭礦の社会史研究会」はその代表的なものである。『新聞記事にみる茨城地域の炭礦と社会　明治大正編』の「序」にも述べられているように、その狙いは常磐南部地域（茨城県域の常磐炭礦）における近代の石炭産業―それは炭礦資本と炭礦労働、そして炭礦社会を含む地域社会の総体を指するものと編者達は考えている―の位置を明らかにし、炭礦労働と地域社会に焦点をすえて、その地域の近代社会を俯瞰することにおかれている。そのためには、この地域の石炭産業に関する基礎的史料が欠けている現状からみて、まず、炭礦に関する新聞史料と炭礦に生きた人々の聞き書きからその空白を埋めようというのである。こうして地道な研究を積み重ねてでき上ったのが、ここに紹介する二著である。われわれは新聞記事の収集や聞き書き（「聞きがたり」）史料の原稿化の作業が、いかに時間と労力を要するものであるかを充分に知っている。われわれはまず、こうした編者達の長期間に亘る地道な努力に深い敬意を表しておきたい。石炭産業に関心のある方々は是非この二著を手にとって、編者達の労作を読んでいただきたいが、ここではその内容について若干紹介しておきたい。

まず、『新聞記事にみる茨城地域の炭礦と社会　明治大正編』は一九〇五年から一九二二年にかけての「いはらき」「常磐新聞」などの茨城県内紙と「東京朝日新聞」「東京日日新聞」「時事新報」などの全国紙茨城県版に掲載された茨城県域の常磐炭田（常磐南部炭田）に関する記事を収集した史料集である。本書の「解説」によれば、常磐炭田と通称される産炭地域は茨城県多賀郡を南端とし、福島県双葉郡富岡町を北端とする範囲にまたがる炭田地帯のことを指すが、それは地質構造、炭質の状況、炭質の性格などによって、四つの地帯に区分されるという。すなわち、福島地域の双葉地区、石城北部地区、石城南部地区の三地区

と茨城地域の四地帯である。このうち、福島地域を総称して常磐北部炭田、茨城地域を総称して常磐南部炭田と通称しており、本書はこの常磐南部炭田に関する明治・大正期の新聞史料集ということになる。

本書では、全体を「便宜的に」、日清戦争期（一九〇一～一九一一年）、第一次大戦期（一九一二～一九一九年）、第一次大戦後期（一九二〇年～一九二六年）の四つの時期に区分している。そして、新聞記事の内容を第一章茨城地域の炭田概況、第二章炭礦会社・経営、第三章石炭輸送・販売、第四章炭礦労働・争議、第五章炭礦災害、第六章炭礦生活、第七章炭礦と地域社会の七項目に分類し、各章の新聞記事を右の時期区分に従って配列し、各章の事項が段階的に追えるように工夫がなされている。勿論、編者達も認識しているように新聞史料のもつ問題点や限界はあるが、それは利用する研究者側の厳密な史料批判によって「積極的意味をもった史料として」生かすことができるのである。第一次史料を欠く常磐炭礦史研究においては新聞史料はそれを補い得る重要な史料といいうるだろう。特に編者達が重視するような炭礦をめぐる地域社会の動向や炭礦の人々の生活史を明らかにしようとする場合、新聞史料は一級史料といわなければならない。

なお、巻末の「解説」はそれぞれ自体が一八九〇年代から一九二〇年代にかけての常磐炭礦の通史であり、編者達の共同研究の「深さ」を窺わさせる巻末の詳細な「付表」とともに、石炭産業史研究に多大な貢献をなすものである。ただ、一つだけ欲を言えば、対象地域の地図が挿入されていれば、より利用者の理解を助けたのではないかと思われる。

つぎに、『聞きがたり茨城の炭礦に生きた人たち』は常磐南部炭田に生活した炭坑労働者とその家族や炭礦経営者ら三七名の人々の聞き書き史料集である。そこには常磐炭田に働く人達の生産活動や日々の生活が生き生きと語られており、文献史料では窺うことのできない炭礦地域社会の鼓動をわれわれは緊迫感をもって感じとることができる。

そこに語られている内容をアト・ランダムに挙示すれば、炭坑労働の実態（先山と後山の作業、運搬、選炭工程など）、飯場の組織とその機能、友子制度の実態と友子取立式、炭礦住宅での労働者家族の生活、戦時下の徴用坑夫（勤奉隊、朝鮮人労働者など）、炭礦災害（自然発火、発破事故、運搬事故、感電事故など）、鉱害問題（洗炭水の排水汚染、農地の陥没など）、炭礦経営の実態、戦前・戦後の労働争議など多岐に亘るものである。特に盤圧の異常な高さからくる「盤膨れ」や事故の多発といった悪条件のもとでおこなわれた常磐炭礦の石炭産業の実相が余すところなく語られているのである。

聞き書き（「聞き語り」）の醍醐味ともいうべきものであろう。

また、前著と同様、巻末には地区別の炭礦会社の消長を詳細に示す「解説」と出炭量と従業員数の推移に関する「付表」がつけ加えられており、炭礦炭田の発展過程を知る助けとなる。

以上、ここに紹介した二著は常磐南部炭田の明治末から一九七〇年代の閉山に至る歴史を解明するうえで貴重な史料であり、石炭産業に関心のあるできるだけ多くの人々がこの史料集を直接ひもとかれんことを望みたい。最後に、「最終的に通史編の刊行」を意図されている「炭礦の社会史研究会」のメンバーの研究の進渉を心から期待するものである。

〔現代史研究所　一九八六年十二月　三〇〇〇円〕
〔現代史研究所　一九九〇年三月　二〇六〇円〕